

実践報告

オンデマンド留学プログラム

— 開発と実践 —

関 戸 冬 彦

On-demand Study Abroad Program

— Development and Practice —

SEKIDO Fuyuhiko

はじめに

本稿は本学国際交流サポートセンターを中心に行っているオンデマンド留学というプログラムに関する開発と実践についての報告である。まず、オンデマンド留学とは何か、どういうコンセプトをもって企画したのか、についての説明を施し、その後に具体的な実施方法について言及する。さらにこのプログラムに参加してくれた参加者の反応についても紹介し、それを基に考察を加え、結びとする。コロナ禍にあって従来の意味での留学が難しくなり、それが本稿執筆時点の今なお続いていることを鑑み、このプログラムが新たな留学的学びの可能性を示唆していることを提示することもまた、本稿執筆の目的である。なお、本稿でいうオンデマンド留学における使用言語、学習対象言語は英語である。

1 オンデマンド留学とは何か

従来、留学と言えば海外、つまり物理的、地理的に日本を離れ、諸外国の大学のキャンパスに実際に行き、そこで学ぶことを意味した。ところが2020年に入り、世界が新型コロナウイルス蔓延の脅威にさらされて以来、学生はおろか特例でない限り凡そ誰であれ、まともに日本を出入国することすら当たり前になることではなくなってしまった。これはほぼ前述の従来の意味での留学は絶望的な状況になったと結論づけるに等しい。ではこのまま、いつかそれが解除されるのを待つ以外に留学は実現しえないのだろうか。いや、そもそも前提条件である物理的、地理的にその場に行くことだけを留学と思ったままでいいのだろうか。この問いに対して否、そうではない違ったアプローチがあるのではないだろうか、という提案をするのが今回のオンデマンド留学という企画であり、本稿はまずこの部分に関する説明から始める。

オンデマンドという言葉は、特に大学においては、2020年にオンライン授業がむしろ当たり前、いやそれ以外に大学が授業を行う方法がないとなった際に急速に普及した感がある¹。要は、授業内容を事前に録画しておき、学生あるいは受講者はそれをいつでも好きな時に視聴し、学習するという方法である。周りを見渡せば実はこれはそんなに目新しい方法でもなく、予備校である東進ハイスクールはサテライブという名称ではあったものの、授業を録画し配信するということは結構以前から行っていた²。また、今回のオンデマンド留学プログラムでも内容学習として使用したサルマン・カーンのカーン・アカデミー、反転授業的なプログラム開発、に関する

1 たとえば以下のようなサイトがある。オンライン授業とは？ ([google.com](https://www.google.com)) ほかに、各大学で説明しているサイトなどもある。

2 1991年4月にサテライブを開始し、1992年3月に東進衛星予備校として全国展開を始めている。株式会社ナガセ | 東進ハイスクール/東進衛星予備校/四谷大塚/イトマンスイミングスクール/東進こども英語塾 (toshin.com)

TED Talkが行われたのは2011年のことであった³。よって、反転授業がオンデマンドの名の下に時代を経て市民権を得た、そんな感覚に近いかもしれない。そこで、海外に行かずとも留学したのと同等の学びを得るにはどうしたらよいか、と問うた際に思いついたのが、このオンデマンド形式を用いた英語学習方法であった。そもそも、留学とは学ぶべき内容、専門分野を海外の大学で学ぶために必然的にある一定の語学が要求されるので語学的な側面も重視されるが、語学そのものを学ぶというのは本来の意味からするとそれは大学における留学の定義ではないように思える⁴。それだけ、つまり語学学習のみ、であれば日本国内の大学の授業でも十分に英語関連科目はあるし、また英語学習に関する書籍や方法はほかにもいくらだってこのインターネットが普及した時代においては十分すぎるほどある。それらを全て無視して海外に行きさえすれば、英語を話すべき機会があるだろうから、それゆえ英語が出来るようになるんじゃないかという淡い期待が一定程度あるのかもしれないが、それは全くもって幻想のように思えてならない。それは例えるなら、プールでは泳げないし、泳ぐ気持ちにもなれないが、海に行けば自然と苦勞することなく泳げるようになっていないか、というのとほぼ同程度の発想、幻想であるまいか。話を英語に戻すと、日本において英語を使えないならばそれは海外に行ったところで同じで、また海外に行ったとしてもそこで何がしか日本語で事足りてしまうような環境にいるのならなおのこと、もはやそれはただの観光旅行だろう。逆に、日本にいながらにして英語を使い、かつそれが単に“Hello”程度の日常的な会話だけではなく、ある特定の学習事項や専門分野的なところと結びつき、それをめぐって英語で対話や議論がなされるのであれば、それは十分に先に述べた本来の留学の姿と遜色ないことになる。今回、オンデ

3 サルマン・カーン: ビデオによる教育の再発明 | TED Talk

4 もちろん語学留学という言葉もあるし、そうしたプログラムを執筆者自身が大学生の時に経験してはいる。なお、文部科学省は「日本人の海外留学」についての以下のサイトで見解を記している。5.日本人の海外留学: 文部科学省 (mext.go.jp)

マンド留学で目指したのはこの部分、日本においても専門分野の学習事項をめぐって英語で対話、議論する、であった。

この考えを実現するのに役立つツールがいくつかあるのでそれをここで紹介しておく。ひとつめはzoomである。これはテレビ会議システムで、物理的な場所は関係なくオンライン上での会話が画面越しに可能となるものだ。オンデマンドという言葉と同様、コロナ禍で広く市民権を得たツールのひとつだろう。もうひとつはTeamsである。これはマイクロソフト社のツールで、zoom同様ビデオ会議的なものも出来、かつチャットなども出来るSNS的総合コミュニケーションツールといったところだろうか。本学では教員も学生もIDナンバーで紐づけられているのでグループで何か活動しようとする際にはとても利便性がよい。これらのおかげで物理的、地理的な条件、つまり同じ場所、教室に同じ時刻に集まらなければならない、という制約的な障壁はかなり取り払われた。

次に、学習事項に関しては、例えば海外の大学のコンテンツ、具体的には授業の録画、などの提供を受ける、あるいはそうしたものを探す、という選択肢も企画当初にはあったが、これはなかなか簡単ではなかった。よって、入手がしやすく、かつ使用するにしても許諾申請や使用料などがかからずオープンになっているもの、として考えてみると、それが一番簡単で、かつ学べることも多いと判断出来たのがTED Talkの動画であった。ウェブ上にアーカイブがあるのでいつでも誰でもアクセス出来る。であるならば、このTED Talkをいわば授業、つまりは内容的な学習事項、に見立て、それを視聴し、その内容をめぐって学習者が英語で対話、議論すれば、先に述べた、日本にいながらにして専門分野の学習事項をめぐって英語で対話、議論する、が可能となる。ではどのような内容であればより深い学びが出来るだろうか。もちろん、学習者の興味、関心に依じてそれは異ってくるのは当然であるが、おそらく万人、主に本学学生、に共通するであろう内容は自分自身との向き合い方、あるいは人生そのものへの問いかけ、のようなものに思えたので、そうした内容を含んでいるものを

軸に国際交流センターのスタッフと共にまずは動画リストを作成した。そしてその結果、まずは以下の4つのものを選定した。

サルマン・カーン：Let's use video to reinvent education

アンジェラ・ダックワース：Grit: The power of passion and perseverance

キャロル・デュエック：The power of believing that you can improve

スティーブ・ジョブズ：How to live before you die

最初から4つだけにしようと意図していたわけではないが、これら4つを基に学び、それで1クール（期間）とし、英語で対話するという素案のようなものは出来た。とはいえ、動画を観ただけで「さあ話しましょう」では議論はそんなにスムーズにはいかないかもしれない。よって、学びを促進するための専用シートを考案した（Appendix）。これは左側に Summary と Question を書き、事前準備として英語で記載する。当日はこれらの記述を zoom の画面共有機能を用いて他の参加者に示しながらまずは各自で紹介する。その後、これら、特に Question を基に全員で対話、議論する。そして終わった後にシートの右側を用いてその日学んだこと、What you learned と次回までに今回の学びを活かした形でしておくこと、Next Action を同じく英語で記入し、まとめておく。次の回はこの右側を紹介するところからスタート、というサイクルにした。

いわゆる英会話的なものだけだと内容的な学びがなく、なんとなく英語を口にしたくらいな感覚で終わってしまう。留学と称するからには先にも述べたようにそれ相応の内容的な学びがないといけない。その点、上記の TED Talk はその内容自体もさることながら、そうした概念、感覚をどう日常生活に取り入れるか、活かすか、といった点も含め学びが多く、その点を Next Action に反映させたいというねらいもあった。なお、この動画を見て対話するというスタイルはいわば反転授業形式であり、それこそ

カーン・アカデミー流であるが、執筆者がEMS（エッセンシャルマネジメントスクール）で行っていた学び方に学んだという点もこのスタイルの確立には多分に影響があった⁵。また、4回で1セットとすると約1か月となり、最初に始める実験的期間としてはこのくらいが妥当だろうとの判断からこの期間にした。もちろん、3か月や6か月も考えられなくもないが、途中で離れてしまう参加者を防ぐためにもまずはこのくらいで、という期間と思い、設定した。

2 実施方法

さて、実際の実施方法であるが、人数としては参加者4名を1組とし、そこにファシリテーター（司会進行学習促進係）をつけた、計5名編成にした。ファシリテーターをつけた理由としては、一般的にファシリテーターとは場を司る役割で、基本的には進行に徹して個人の見解は極力言わず、場があまりにもオフトピックなど目的に照らして合わない事態が発生した際には介入して適切な場へと調整する役割も担うので、例えば全員が黙ってしまってなかなか対話が進まない時や、逆に特定の人だけが話しすぎないように調整するという意味も含め、この役割を設けることにした⁶。また、メンバーの中の誰かが常にリーダーのようになり、場を過度にコントロールしてしまうのを未然に防ぐという意味合いもあった。

実際の開始時期は2021年5月であったが、実は3月くらいからパイロット的なものを前述の内容で有志を対象に行っていた。そこで集まった3名（パイロットプログラムには4名が参加した）にファシリテーターとしての役割を担ってもらうことにした。ファシリテーターは前述の基本的な役割に加え、言語学習的にはなかなかうまく表現できない学生がいたならばその意図を汲み取ってパラフレーズしてあげるという役割や、内容理解と

5 EMSではこれをMBAL（Movie Based Active Learning）と呼んでいる。

6 ファシリテーターに関しては『ファシリテーション入門』などを参照。

しては対話中に理解への媒介としての発言や質問の投げかけもしてもらおう。そして5月開講を目指して4月中旬に募集のアナウンスをしたところ、募集定員16名に対し結果16名（教育学部、経営学部、法学部、1～4年生）が応募し、定員を無事に充足することとなった。そして、応募者を4名1チームの4チームに分け、曜日時間は月曜、金曜の5時限目（実際には16時40分からの1時間）を開講時間とした⁷。

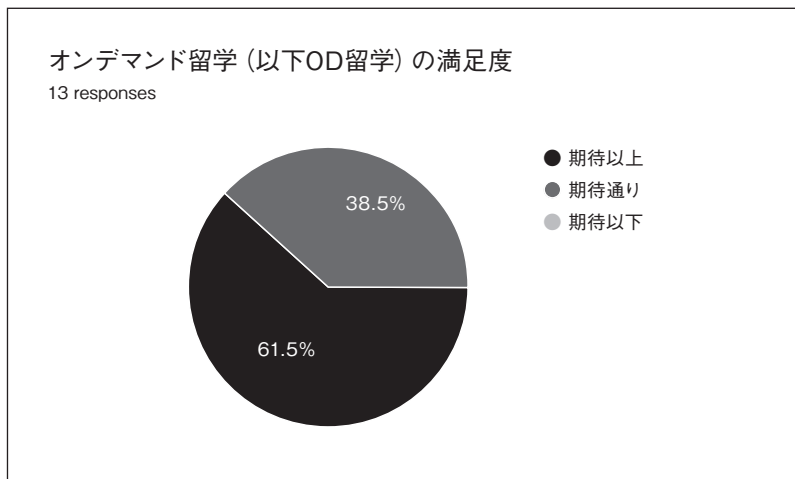
先にTeamsの活用について触れたが、これはチームビルディングのためでもあり、チーム毎にスレッドを用意し、それぞれのスレッドに記入済シートをアップして相互に、そして自分たちのチーム以外のものも自由に読めるようにしてある。これはそうすることで起こるであろう学び合いの効果을期待している部分もあった⁸。

3 参加者の反応—アンケートから

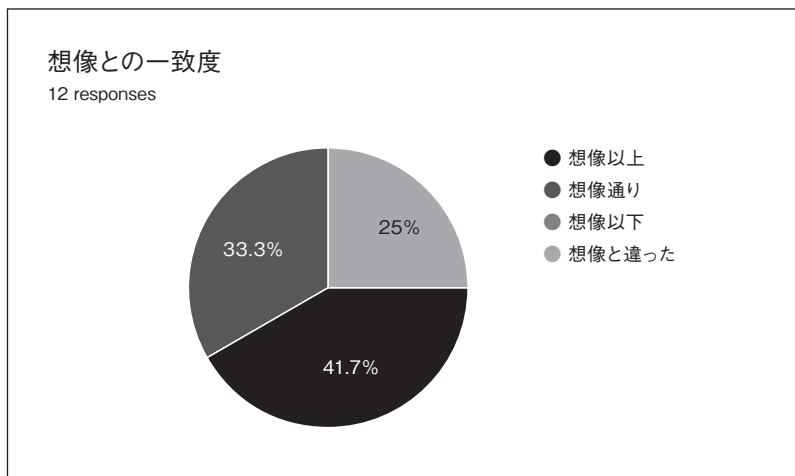
ではこうしたオンデマンド留学を実際に体験した参加者はどのように感じていたのだろうか。5月期終了後にアンケートを実施したので、その内容をまずは見てみたい。質問項目は運営上に関するもの、自由記述回答も含めると全11項目で、参加者16名中13名が回答した。以下、順次その結果を見ていく。まず、「オンデマンド留学の満足度」に関しては期待以上が60%強、期待通りが40%弱で、期待以下はなかった。よってこの企画そのものの意図と、それに対する参加者の満足度、言い換えるならばニーズ、が合致していたと言えるだろう。これは最後の「参加してよかったと思う」の項目とも繋がっている。

7 月曜は5月10、17、24、31日に、金曜は5月7、14、21、28日に実施した。なお6月に第2期を開催したが本稿は5月第1期にのみ言及する。

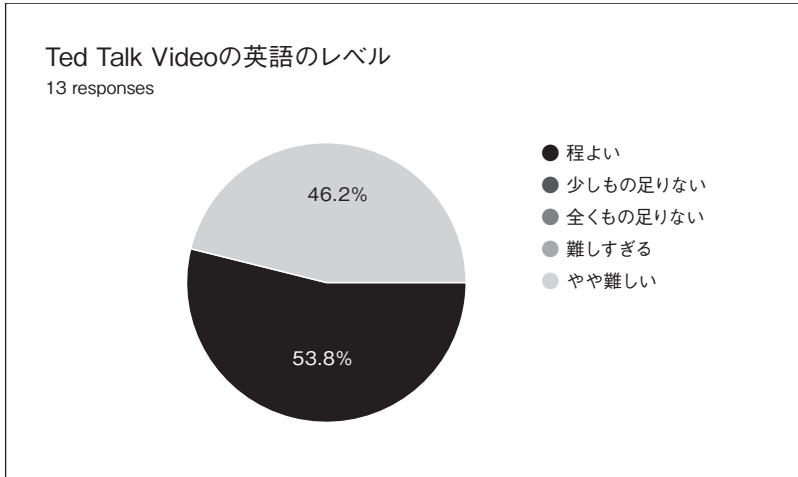
8 チームを超えた学び合いに関しては『コミュニティ・オブ・プラクティス』が詳しく、ノウハウ的なところはこの書籍、ならびにありえる楽考式スタイルを参照した。後者についての説明については拙論を参照。



「想像との一致度」については40%強が想像以上、想像通りが30%強、想像と違ったが25%であった。想像と違った、に関する詳細、および分析などは後述したいが、留学=ネイティブスピーカーがいる、といった期待もあったようだ。そことの認識のズレのようなものが、想像と違ったという選択肢を選ばせた一因かもしれない。

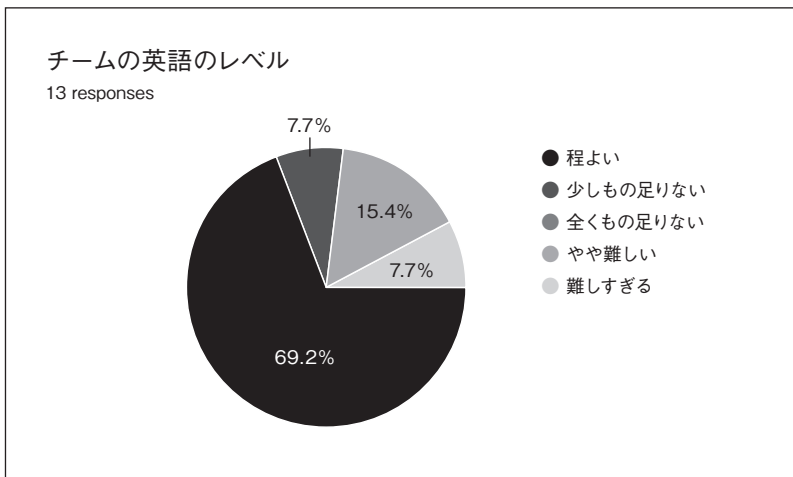


「TED Talkの英語のレベル」に関しては、程よいとやや難しい、が半々に拮抗しており、コンテンツそのものの理解度とはまた異なるかもしれないが、少なくとも話されている英語がわかる、わからない、という点においては理解しうる、あるいは理解しようと挑戦するにはちょうどよいものだったと言えるだろう。

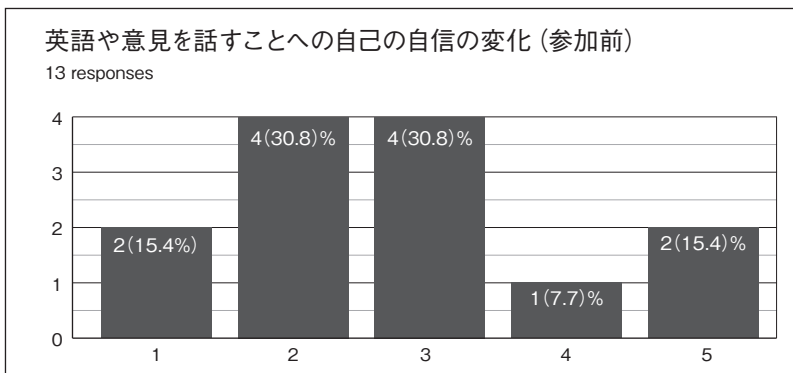


「チームの英語のレベル」、これは参加者個人の英語レベルの認識とも関係あることでもあるのだが、70%弱の参加者は程よいと答えているので、チーム内でお互いに何を言っているのか、言おうとしているのか、が凡そはわかるであろうことを示唆している。逆に少しものの足りない、難しすぎる、はおそらく自分と比べてチーム内での英語力の度合いが均衡ではないと感じていたのかもしれない。実際、今回に関してはチーム作成にあたり、学部や学年、性別などは判断材料にしたが、英語で面接したわけでもなければ、客観的に英語力を何かで測ってそれを基にメンバーを組み合わせたわけではない。つまり、その時点での英語の運用能力に関しては考慮には入れなかった。この点についてはいろいろ議論があるとは察するが、同程度の運用能力を集めたほうが運営の観点からもスムーズという考え方もあ

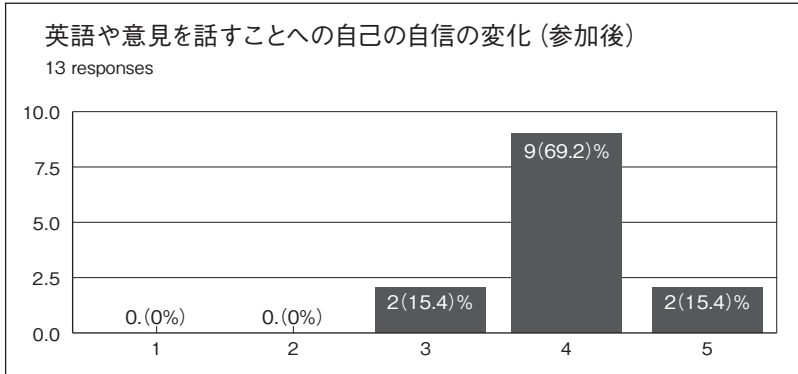
れば、そうしたことを考慮せず、その中でお互いに学び合ったほうがよいという考えもあり、今回は後者を軸にしていたので、この点に関してはこの結果から次どうするかは検討事項でもある。



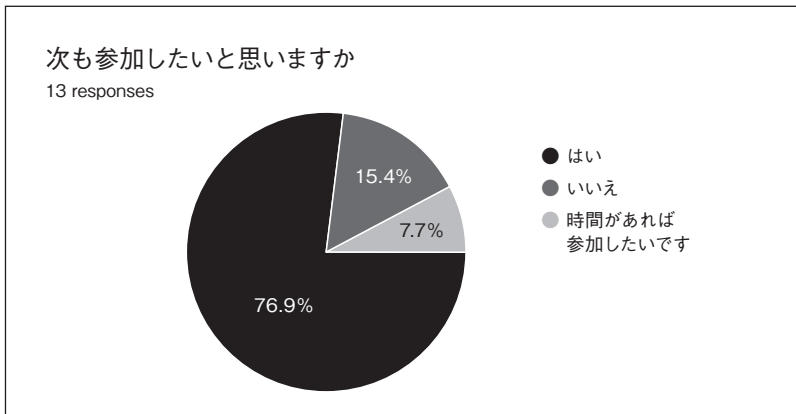
「英語や意見を話すことへの自己の自信の変化（参加前、参加後）」は、1～5の数字を選ぶ回答方法で、不安が1、楽しいが5という数値に設定した。よって3だとすると不安もあれば楽しみでもある、といった解釈になる。参加前は以下のグラフが示すように不安のほうが優勢を占めていた。



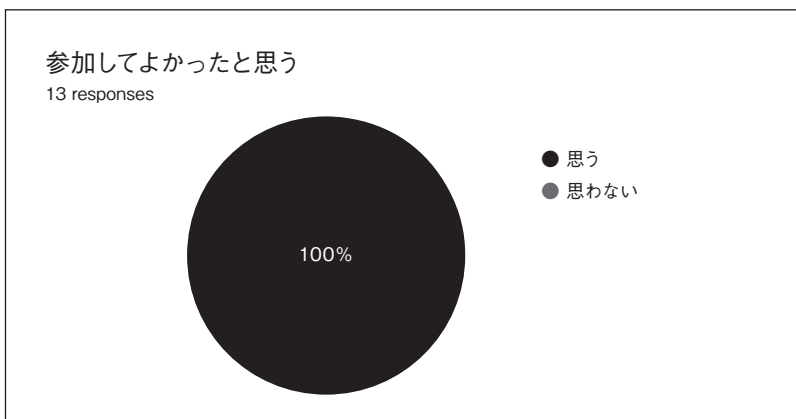
ところが参加後は4を選んだ参加者が70%弱で、不安から楽しいへと気持ちに変化したことがわかる。よってこのプログラムに参加する中で、参加前に感じていた不安はかなり払拭されたことが見て取れる。



「次回も参加したいと思いますか」に関しては、はい、つまり参加したい、という声が全体の3/4強を占めた。実際、5月期が終わってからの次の6月期にリピーターとして参加表明してくれた参加者、あるいはファシリテーターになりたいと意思表明してくれた参加者など、何らかの形で再び関わりたいと思ってもらえたことはプログラム自体に魅力があったのだろうと解釈したい。逆に、いいえ、と答えた参加者がいたことも事実なので、その理由が何なのか、プログラムが原因なのか、個人的な何がしかの事由からなのか、は追って確認したいところでもある。



「参加してよかったと思う」に関しては100%、思う、だったので企画した側としては提供したプログラムそのものは一定の役割を果たせたと考えている。



なお、自由記述回答であった参加者側からのさらなる要望としては、先にも紹介したように「ネイティブスピーカーの参加」的なものもあったが、これらに関しては改善点として後述する。

ではファシリテーター側はどう思っていたのだろうか。これに関しては、

執筆者が実際に質問形式（直接ではなく、Teamsのメッセージ機能を使っ
ての個別でのやりとり）で実際に担当した前述の3名から回答を得た。執
筆者としては、参加者から企画、運営側へ回ることで気づき、学びを期
待していた部分もあり、それらに関してはまず「どのように場を盛り上げ
ようか、今じぶんは何をしたらメンバーの助けになるのかなどを考えて行
動できるようになった」「悩み相談などもして貰って、ファシリとして信
頼してくれていることに喜びを感じた」と自分の役割に意識的になった部
分があったようだ。また、「メンバーが平等に喋れるよう、気を配ること」
「メンバー一人の発言が、他のメンバーに伝わってなさそうだったら自分
が簡単に解釈するか、その人に説明してもらうよう促すこと→みんなに役
割を与えることも大切」といった、チームビルディング的な部分に意識が
働いていたようだ。これらは彼らなりの気づき、学びと言える。逆に、ファ
シリテーターという役割の難しさも感じていたようで、例えば「流れをど
のようにまとめて持っていきのが難しいこと」「どこまで介入していい
のかというところが少し難しかった」「一人一人、能力差があり、それを
どう捉えてどう埋めるのか工夫することが難しかった」などの点が挙げら
れた。なぜこれらの点が難しかったのかについては「メンバーの発言に対
し、リアクションを取ることの大切さ」「リアクションの有無が大きく関わ
っている」という意見からも察することができるように、なかなかメンバー
の反応から今どう思っているのか、どうしたらいいのか、の判断がつきに
くかったことが原因と推察される。なお、「(この) 三人でやるときは二人
ともちゃんと自分の話を聞いてくれているリアクションをしてくれている
ので話す側としてもとても自分の意見を主張しやすく、なんの気負いもな
く深い議論ができたように感じた」とのコメントもあり、ファシリテーター
を経験することでどう普段とコミュニケーションの仕方が違うのかに気が
ついた部分もあったようだ。

最後に、職員についても若干触れておく。情報発信としての国際交流サ
ポートセンターの協力はこの企画をととても後押ししてくれた。センターと

しては元々留学に関して何がしかを試みたいと思っていたようで、そこに執筆者のアイデアが合致してこのオンデマンド留学をいうプログラムは開発できた。その過程において担当職員もいろいろアイデアを試行錯誤し、また運営に関しても同様に最大限尽力してくれたように思う。当初は「これであっていますか?」「教えてください」といったようなやりとりもあったが、進むに連れ「こうしてみます」と自律的になっていったところに成長があるようで、それはこのプログラム自体、何か誰かがどこかで決めたものを「やらなければいけない」ということでは全くなくて、むしろ自分たちが「やりたいからやりたいようにやる」、それが結果としてプログラム全体、参加者全員の動機づけや学びへの興味、関心を促すものになる、を執筆者は密かに目指していたところもあり、結果として担当職員はそれを自ら実現してくれた形となった。ここにも本プログラムが好影響をもたらした一事例が見て取れる。

4 考察 一 問題点と対応策

これらのアンケート結果、ならびにインタビュー結果から察するに、プログラムそのものへの評価は一定の満足度を得られたと言えるだろう。とはいえ、問題点や改善点が全くないというわけでもない。ここではそれらについて記す。まず、アンケート結果にあった、「イメージと違った」という部分について、自由記述からは「ネイティブの学生が誰かしいるのかと思った」とあり、今後そうした学生を含めてはどうかとの提案があった。留学が現地の学生との交流、学び合いを含み、また参加者がそれを期待しているのであればそういう意見もあるだろう。ただ、注意したいのはネイティブの学生がいることと、参加者自身の英語力がそれで向上するかどうかは別問題であるという点である。相手がネイティブであろうとなかろうと、自身が発する英語力の向上を図りたいのであればその点は関係ないし、ネイティブの言ったことを自分が聞き取れるどうかを試したいので

あれば、それはいくらかでも違う方法でも試すことが出来る。とはいえ、もちろんこのプログラムに参加したいというネイティブの学生、あるいは本学に留学生してきている学生で興味関心のあるもの、がいれば共に学べる機会を得たいと思うのは論を待たない。つぎに、「内容を募集の時に示してほしい」という声があったが、これはおそらくどういうコンテンツを学ぶのかを事前に知りたいということなのだろう。それはそれで理があるし、わかる部分でもあるのでどのコンテンツを用いるか自体は事前に、あたかもシラバスのように、公表しておいてもよいのかもしれない。と同時に、内容を個々に理解するのと同じくらい、それを時間内における対話や議論でどう活かすか、も重要なので、またそうした部分も含めて、事前のガイダンス、あるいは募集説明会のような企画も今後出来たらと思う。最後に、これはアンケートにはあがってはいなかったが、執筆者自身が感じたものとして、2点ほどあげておきたい。1点目はコンテンツでも英語でもなく、zoomの画面共有機能が思いのほか、参加者が使えない、使い方を理解していない、という部分だ。実際に起こるのは、いざ始めて、さあシートを見せて始めようといった段階で「画面共有のやり方がわからない」「うまくいかない」などが起こり、それに対処するのに数分、かつそれがひとりだけでなく複数人起きるとそれだけで結構な時間を喰ってしまう。よって6月期には有志メンバーがそれに関する取扱説明書の動画を作ってくれたりもした。慣れてしまえばボタンひとつ押すだけの誰でも出来るもののように感じるものなのだが、そうした部分に関するリテラシーも事前に練習会的な企画が必要なかもしれない。2点目はシートの右下、Next Actionへの記述で、ここを設けた理由は、若干前述したように学んだコンテンツ、考え方、行動様式的な部分、を実際の日常生活で活かしてどうだったか、それを体験として学んでみる、たとえば第3回で扱ったキャロル・S・デュエックのmindsetであればそうした考え方を実際にした場面があったか、その時自分はどう思い、どう行動したのか、ということ振り返ってからの気づきを促すことがねらいのひとつでもあったのだが、一部の参

加者はこれを次回の際に何をするのかと勘違いし、I want to speak more 的な内容に留まってしまっていたため、つまりは内容には一切触れずに単に英語を話すという側面にだけ着目してしまっていた感があり、これでは当初に掲げた、コンテンツを通しての英語学習＝留学、ではなくなってしまう。よってここを如何にして理解してもらい、浸透させるかは今後の課題でもあり、ファシリテーターたちとも検討していきたい部分でもある。

なお、今回このプログラムを通して執筆者が思い描いていたもう一つの側面は、先の担当職員のところでも少し触れたが、教員、職員、学生といった立場の違いを超えてのチーム、組織作りであり、企画者、参加者としてはそうした肩書は不要で、むしろ立場に関係なくみんなで作る、みんなのためのプログラムとしたかった。これは言い換えるならば自律自転する組織であって、誰かが決めたことを「こうしてください」というようなトップダウンではない組織作りでもあった。そうするためには参加者ひとりひとりが自分の意志を示し、その中でやりたい事、出来る事を見つけ、個々が成長していく、そんな場が作れればと願っていた。この点については全員が一様にそうなったかどうかは明言出来ないが、前述のように、ファシリテーターを務めてくれた参加者たちは何がしかの面で自発的な行動をしてくれたように感じている。この点についても、このプログラムが続く限り、追って随時検証していきたい。

おわりに

ここまで述べてきたように、物理的、地理的条件を取っ払った上での留学代替プログラムとしてのオンデマンド留学は英語を使う機会を参加者に提供し、同時に内容学習も取り入れ、それを基に参加者同士で学び合うという場を提供した。今後はこのプログラムがより学びが多く、かつさらに満足度の高いものにするべく検討し、発展させられるよう尽力する。末筆ながら、このプログラムを開発、実施、運営するにあたって多大な努力を

惜しまずにしてくれた国際交流サポートセンター職員、有志参加からファシリテーターを担ってくれた学生たち、そして全参加者に感謝の意を記して本稿の結びとする。

参考文献

- エティエンヌ・ウエンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー、野村恭彦監修、野中郁次郎解説、櫻井祐子訳、『コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』、翔泳社、2002年。
- 関戸冬彦、「学習者の学びを活性化させるためのいくつかのアプローチ ― ありえる楽考式を参考に」『マテシス・ユニヴェルサリス』第21巻1号、153-165、2019年。
- 堀公俊、『ファシリテーション入門』、日経文庫、2004年。

Appendix

Summary	What you learned
Questions/ Related experience	Next action

(本学法学部准教授)